



最新記事 中東

1 2 Next

イスラエル総選挙後に待つネタニヤフの過酷な運命

2019年9月25日 (水) 16時50分
 ジョシュア・キーティング



ネタニヤフ外しが現実となれば、汚職疑惑の追及は強まるだろう AMIR COHEN-REUTERS

<2度目も与野党とも過半数に届かないなかで「ネタニヤフ抜き大連立」構想が動き出す>

イスラエル建国以来、歴代最長の在任記録を更新中のネタニヤフ首相。つい最近まで不敗神話に彩られていたこの男が、今は決死の綱渡りを強いられている。9月17日に行われたやり直し総選挙で、政治生命も身の安全も、そして中東のみならず世界情勢の雲行きも怪しくなってきたからだ。

なぜか。4月の総選挙段階でも彼の権力乱用・汚職疑惑に対する検察の捜査は大詰めを迎えていたが、それでも与党リクードはベニー・ガンツ元参謀総長率いる中道政党連合「青と白」と同数の議席を獲得し、どうにか従来の右派連立政権を樹立できそうに見えた。

ところが、かつてネタニヤフの秘蔵っ子だった極右のアビグドル・リーベルマンが反旗を翻した。超正統派ユダヤ教徒だけに許される徴兵免除の特権を法律で制限しない限り自分の政党「わが家イスラエル」は連立に参加しないと宣言したのだ。この問題はネタニヤフにとってのアキレス腱。連立工作は失敗し、やり直し総選挙となった。

しかし今回も「青と白」の獲得議席は33で、リクードは31と伯仲した。連立の行方は読めない。議会の過半数は61議席だが、「わが家」を除く右派・宗教勢力は合計で55議席。対する中道・左派勢力は44議席だが、アラブ系統一党派「ジョイントリスト」はガンツによる組閣に賛同する意向を示している。前代未聞のことだが、ネタニヤフの続投を阻止するためだ。ただし、それでも議席数は57にとどまる。

つまり、どう転んでも連立工作は難航する。そしてカギを握るのはリーベルマンだ。

計算上、最も可能性が高いシナリオはリクードと「青と白」の大連立で、これはリーベルマンも支持している。過去にはリクードが左派の労働党と連立を組んだこともあるので、あり得ない話ではない。しかしガンツはネタニヤフの降板を大連立の条件としている。

トランプも見限ったか

ネタニヤフはこれまで何度も苦境を乗り越えてきたが、今回ばかりは容易に抜け出せそうにない。イスラエル検察は10月に事情聴取を予定しており、既に収賄罪での起訴を視野に入れているようだ。

入札で大物実業家などに便宜を図る見返りに本人と親族が高額な贈り物を受け取った疑惑、メディア報道に影響力を行使した疑いなど、検察は長年の捜査で立件の自信を深めている。

次のページ 収監の可能性も

1 2 次のページ

今、あなたにオススメ

- トランプ弾劾調査の引き金になった「ウクライナ疑惑」のすべて

2019.9.25
- アメリカをめちゃくちゃにしたトランプ、それでも支持する労働者たちの「思い込み」

2019.9.25
- ドラマ『チェルノブイリ』、事実がまっすぐ伝えられない状況は、まさに今の日本の姿だ

2019.9.13
- 世界初の旅行代理店トーマス・クック破綻 英国人旅行者は公的支援で帰国へ

2019.9.25

- 小惑星に人工物に衝突させて、地球への衝突を防止する実験が開始間近に

2019.9.24
- 糖尿病の原因はアレだった？ 高い血糖値はあるモノでガクッと下がると話題に

AD (Wakan for health)
- 韓国、海上自衛隊観艦式に不参加 国防省「招待されず」

2019.9.24
- ソフトバンクとみずほ銀行が始めた新サービスがすごすぎる件！

AD (J.Score)

Content X powered by

関連記事

- イスラエル政治の停滞と混迷は続く.....やり直し選挙の行方
- トランプがツイート→イスラエルが入国禁止 ネットニヤフの危険な賭け
- 【写真特集】ホルノ女優から受付嬢まで、トランプの性スキャンダルを告発した美女たち
- 「批判してばかりでは経済は良くならない」という話が大陸であるこれだけの理由
- 選挙公約にパレスチナ人の土地併合を掲げるネタニヤフ
- 対イラン代理戦争も辞さないネタニヤフの危険な火遊び
- 米イラン戦争になれば、イスラエルがイランを襲う
- 非ユダヤ人との結婚は「2度目のホロコーストのようなもの」？ イスラエル教育相発言の真意

関連ワード

イスラエル トランプ ネットニヤフ 中東

PICK UP

A社 競合 競合メーカーの商品はうちよりEC? 競合と比較できていますか?

シェア ???% 楽天市場 Amazon Yahoo shopping NI

イスラエル総選挙後に待つネタニヤフの過酷な運命

2019年9月25日 (水) 16時50分
ジョシュア・キーティング

総選挙で圧勝していれば、首相在任中の不逮捕特権を認める法案を通して逃げ切ることもできただろう。しかしこの情勢では難しい。ネタニヤフが首相の座から引きずり降ろされ、収監される（イスラエルの首相経験者としては2人目）可能性は高まっている。

頼みの綱のアメリカ政府との関係も怪しくなっている。4月の総選挙直前には、トランプ米大統領がゴラン高原に対するイスラエルの主権を正式に認める宣言に署名したことを利用できた。だが今回は、追い風になりそうな動きがない。トランプがイランのロウハニ大統領との会談に前向きなことも、ネタニヤフには逆風だ。

閣僚や補佐官のクビを次々と切ってきたトランプなら、いつネタニヤフを見限ってもおかしくない。総選挙で明らかのように、今もイスラエルでは右派が優勢だ。ガンツですら、それほど左派的とは言えない。今の混迷が教えてくれる教訓は1つ。指導者の欠点や弱さは時に政治の、そして国家の命運を左右するということだ。

©2019 [The Slate Group](#)

<本誌2019年10月1日号掲載>

- 【関連記事】 [イスラエル、ゴラン高原の入植地を「トランプ高原」と命名](#)
- 【関連記事】 [対イラン代理戦争も辞さないネタニヤフの危険な火遊び](#)

※10月1日号（9月25日発売）は、「[2020 サバイバル日本戦略](#)」特集。トランプ、プーチン、習近平、文在寅、金正恩……。世界は悪意と謀略だらけ。「カモネギ」日本が、仁義なき国際社会を生き抜くために知っておくべき7つのトリセツを提案する国際情勢特集です。河東哲夫（外交アナリスト）、シーラ・スミス（米外交問題評議会・日本研究員）、阿南友亮（東北大学法学研究科教授）、宮家邦彦（キヤノングローバル戦略研究所研究主幹）らが寄稿。

今、あなたにオススメ